

# 敬語と上下関係

3年A組

K.S.

## 概要

敬語それはみなさんがすくなくとも1回は必ず使ったことのある表現。上下関係、それはみなさんが必ず1回は感じたことのある関係。それらは世界共通のものなのであるか？自分の使った敬語、感じた上下関係は本当に正しいものであったであろうか？という疑問を持った人はいないでしょうか？

各国の言語と上下関係について比べるとそれぞれ違っていること、また、おなじ日本においても場所、時、その人の考え方によって様々に変化していくことがわかった。そして、本当の敬語、上下関係とは何かということを考えていくのである。

しかし、最終的には敬語や上下関係がどうかではなく、人間はすべて平等であるということが大切であるということにたどり着いたのである。福沢諭吉が「天は人の上に人を作らず、天の下に人を作らず」と言ったように全くその通りなのである。人間にとって大事なことはそのことなのである。

## 目 次

### 第1章 A．敬語？ 上下関係？

### 第2章 A．外国と日本での敬語、上下関係の比較

- a．今の日本の現状
- b．中国と日本の比較
- c．欧米と日本の比較

### B．社会での上下関係

- a．会社内での上下関係
- b．スポーツ界での上下関係
- c．「年功序列主義」・「能力主義」

### 第3章 A．社会への影響

### B．思うこと

### 第4章 展望

## 第1章 敬語？ 上下関係？

中学に入り、初めて敬語と上下関係というものを体感した。小学校のときは誰に対しても、友達と話すようにいわゆる1つの、タメ口で話していた。しかし、中学では違っていた。1年でも年上の人には敬語を使い、そして上下関係がある。先生に対しても、もちろん敬語であったが、そういうことには慣れていなかった僕は敬語がうまく使えなくて、注意されることがたびたびあった。初めの頃は「なぜ、1つや2つくらいしか、違わない人たちにまで敬語を使わなければならないのか？なぜ、上下関係があるのか？」という疑問が、胸の中にあっただのである。今でもその疑問がある。今の僕は大人の人には「とりあえず」という気持ちで敬語を使ってしまう。そういう自分がとてもいやである。そもそも、敬語というのは尊敬する人に対して使うものではないのか？また、上下関係も同じことではないのか？「肩書き」だけの上下関係など必要ないと思うのである。

この世の中には敬語や上下関係などがあふれてかえっている。それらすべては本当に必要なものだけなのであろうか？また、敬語や上下関係はどのようにして生まれるのであろうか？本当の敬語や上下関係とはいったい何なのであろうか？

## 第2章

### A．外国と日本での敬語・上下関係の比較

#### a．現在の日本の状況

まず、現在の日本における敬語と上下関係について述べたいと思う。前章で述べた通り僕は形だけの敬語や上下関係がとても嫌いである。しかし、世の中にはいわゆる「年功序列主義」や「肩書き主義」と言われるものが頻繁に使われている。

日本人が敬語を使う時、年齢差や肩書き上で目上か目下か、利害関係の有無、「内」の者が「外」の者かというようなことを考えるであろう。社会ではこのように敬語が使われている。僕たちの通う清教学園では中学から敬語を使うが、実際、一般世間では大学が就職するまではほとんど使われないのである。

#### b．日本と中国の比較

結構前の話であるが、プロレスラーの大仁田あつしさんが高校に入学し、そして今は、大学に通っているらしい。大仁田さんはもう結構なお年であると思う。そこで疑問に思うというか、心配なのが同期に入学した15,16歳の人たちのことである。形式上では同じ学年であるが、年齢は倍くらい違うのである。そんな中、「友達」と言った関係を作ることができるのであろう

か？

高校や大学では中学と違い年齢に関係なく勉強ができるところが良い点である。しかし、それがこのような反面もある。Aさんの大学での体験を例に挙げてみよう。

大学に通うAさんはある日、同じ大学1年生のBさんのことを「B先輩」と呼ぶように強要されました。実は、Bさんは同じ高校の1年先輩であったのですがBさんは1年浪人したため、高校で後輩であったAさんと大学で同学年になってしまったというわけです。Aさんは高校と大学は別の世界なのであるから、その必要はないはずであると主張しましたが、Bさんは納得しませんでした。

このような状況は日本ではしばしばあることでしょう。しかし、このBさんが納得しないというのはどうでしょうか？僕はどちらの気持ちも分かるような気がします。しかし、同じアジアの国、中国ではBさんのような考えはとても不思議なことらしいのである。中国では2、3年以上年上の先輩であっても、敬語を使わずに話すのが、普通らしいのである。

日本では職場の上司、例えば、課長に対しては「課長さん」と呼ぶのが普通であろうと思います。「課長さん」という表現自体が尊敬の意味を持っています。しかし、中国では「～さん」に値する「～先生」という言葉を使わないのであるが、決して上下関係がないわけではありません。会社内では上司と部下という上下関係はあるが、1歩会社から出ると上司と部下という関係はなくなりみんな友達のようなになるのである。

前にも述べたとおり、中国には日本のような上下関係はない。そのため中国語には、日本語のような複雑な敬語が生まれることはなかったのではあるだろうか。あるいは、敬語があまり日常的に使われていなかったために日本のような厳しい上下関係のシステムが生まれなかったのではあるだろうか。

中国語に比べて日本語の表現方法は複雑である。しかも、敬語については複雑かつ、厳密である。この日本語の表現方法の複雑さ、厳密さが日本の上下関係のシステムの厳格さ生み出したのかもしれない。また、日本の上下関係のシステムが厳格であったため、日本語の表現方法が複雑かつ厳密になったのかもしれない。

### c . 欧米と日本の比較

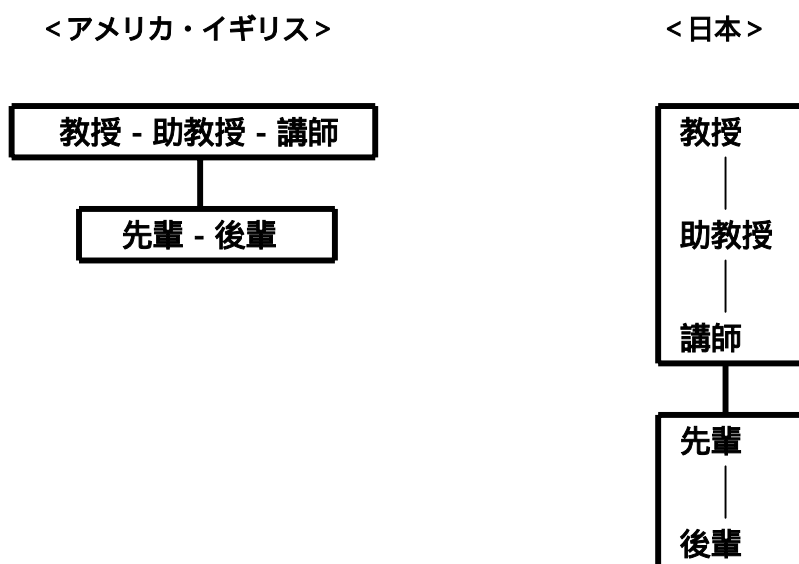
欧米との比較をする前に日本と欧米との関わりについて述べたいと思う。

欧米との関係の始まりは今から約450年前から始まる。もっと前にも関わりがあったかもしれないが、日本史の中で大きなものは鉄砲とキリスト教の伝来である。この2つは後の日本に大きな影響を与えた。江戸時代にはいると、幕府は鎖国体制をとっていたため外国との関わりはほとんどなく、出島で中国とオランダに限って貿易をしているだけであった。しかし江戸時代末期になると、幕府は外国から圧力に負け、ついに開国したのである。そして、明治時代

にはいると急速に欧米文化が広まった。

現在、日本の生活様式のほとんどが欧米とよく似ている。日本と約2000年にわたり、関係してきた中国でさえ、今の日本の生活様式にはほとんど影響していないにも関わらず、約450年という比較的浅い関係である欧米は、大きく影響しているのである。その欧米は、日本の社会の構造についてはどのように影響しているのだろうか？

社会の構造について欧米は日本に影響を与えているかということ、答えは「NO」である。あれだけ日本の生活様式に影響を与え続けてきた欧米でさえも、日本の特殊とも言える社会の構造をかえることは不可能であった。何がどのように特殊であるかということ、中国との比較の時にも使ったように大学を例に比べてみるとわかりやすいであろう。



図が示すようにアメリカやイギリスでは教師の中であっても、教授、助教授、講師とすべてが平等である。それに対して日本では、教師の中では教授がもっとも上の存在であり、それに次いで助教授、講師というように上下関係が作られている。生徒の中でも同様である。アメリカやイギリスでは生徒という1つの集団の中では先輩も後輩も関係なく存在する。日本ではその言葉どおりに先輩、後輩という上下関係が作られているのである。

また、アメリカやイギリスは横に長い。つまり横の関係が強いということである。それに比べて日本は縦に長い。つまり、上下関係が非常に強いということである。それでは、前者は横の関係ばかりで縦の関係のない無秩序な世界かと言うと、そうではない。しっかりと教師と生徒の間には上下関係が存在する。それに比べ後者は、縦の関係は素晴らしいと言えるほどしっかりとしている。そして、横の関係はまったくない。これは友情がないとか、そういうことではない。

このことは日本人がそれだけ「地位」や「肩書き」にこだわっていることを表す。教師、生徒、すべてがこの「地位」や「肩書き」にこだわっているのである。これが日本人の「肩書き主義」という考え方の現れである。

逆にアメリカやイギリスでは、日本のような「肩書き主義」という考え方は存在しない。それはなぜであろうか？それは日本語と英語の表現の違いに関係しているのである。

日本語を話すことのできる外国人はよく「日本語は表現が非常に難しい」と言うらしい。例えば英語で「I」と言う表現を和訳すると「私」,「僕」,「わし」,「自分」,「おれ」・・・などとても多くの同じ意味の言葉がある。しかし、英語で表現すると「I」とたったそれだけで済むのである。

このように日本語と英語には表現について大きな違いがあるということがわかったであろう。このことは他の言葉についても同様である。

「食べる」という表現。物を口に入れ、体内に取り入れるという意味であるが、日本語では「食べる」,「喰う」,敬語表現では「食べます」,「いただく」,「召し上がる」と、実に様々な表現がある。しかし、英語で表現すると「eat」,「have」である。この2つの表現には、先の日本語5つの意味を含んでいるのである。つまり、「eat」,「have」という表現で普通型、丁寧語、謙譲語、尊敬語などすべての意味を表現しているのである。すなわち英語には敬語表現がほとんどないと言えるのではなからうか。

これで日本語と英語には大きな違いがあるということがわかったであろう。

先に図で示したように、アメリカやイギリスの上下関係は日本のそれとはおおきくちがっている。これには日本語と英語の言語表現の違いに原因があったということがわかった。逆にこのような上下関係のシステムがアメリカやイギリスと日本、それぞれの上下関係が英語、日本語とそれぞれの言葉に大きく影響しているとも考えられるであろう。

中国、アメリカ、イギリスと日本について比較してきたが、共通して言えることはそれぞれの国の言語がそれぞれの上下関係のシステムに大きく影響しているということ、また、それぞれに上下関係のシステムがそれぞれの言語に大きく影響をしているということである。つまり、言語と上下関係のシステムは大きく関係しており、互いに影響しあい、それぞれの国の言語、上下関係が作られたということである。そしてそれらは昔から積み上げられ作られてきたものであるからそう簡単に崩すことはできないし、自ら崩れることもないであろう。

## B . 社会での上下関係

### a . 会社内での上下関係

社会にはいろいろな場面で上下関係が少なからず存在する。普通、会社などといった中では、一部例外もあるがほとんど実力で肩書きがつくものである。しかし、実際には実力で肩書きが決まらないという場合が多く存在する。それは「年功序列主義」、「学歴重視」という考え方がある場合である。これらの考え方は実力に関係なく、年齢や学歴というものを中心に上下関係を作り上げていくのである。

「学歴重視」という考え方がもっとも強く反映されているのが入社試験であるらしい。例えば、実力が等しいCさんとDさんが同じ会社の試験を受けたとしよう。その結果、合格したのはCさんだけであった。これはなぜか？実力は等しかったが二人には一点だけ違いがあった。それは学歴であった。Cさんは一流大学といわれる大学を卒業していたが、Dさんは大学へは行っていなかった。しかし、よく考えてもらいたい。その後、Cさんが仕事する中でDさんとの違いは出てくるであろうか？出てこないであろう。なぜなら実力が等しいからである。それならなぜ会社は2人とも入社させなかったのであろうか？それはやはり、学歴であろうか？「一流大学を」出ている者と大学へ行っていない者、会社の外への顔をよくするためにはやはり前者をとるのであろうか。

そのような現実のせいも、先日、おもしろい記事を見つけたのである。それは前に行われた参議院選挙の結果であった。各都道府県の当選者のプロフィールが載っていたのである。始め見ているときはとてもつまらなかった。どの人を見ても、学歴のところにはT大学だの、W大学だの、K大学だのいちりゅうだいがくばかりであったからである。こんないい大学に行った人だけしか、政治家にはなれないのかと思っていた。しかし、1人だけ違っていた。学歴のところは～高校で終わっていた。世の中にはこのような人もいるのだなあと感じた。

やはり、これからの時代は「実力主義」でなければならないと思う。実力こそがすべてを動かす原動力であると思う。肩書きや学歴が通じるものには限界があると思うのである。

## b . スポーツ界での上下関係

実力、実力、と言っているが、もちろん実力だけでは生きてはいけませんが、本当に実力がなければ生きていけない世界が存在する。それらの中では年齢や実績は関係ないのである。すべては実力で決まるのである。実力のある者は上へ行き、ない者は下へと落ちる世界。何とも厳しい世界ではあるが、その世界で生きていくには実力しかないのである。

そんな世界。1つの例としてプロスポーツ界がある。どれだけ年齢が上でも実力がなければ話にならない。どれだけ実績があっても、今、実力なければ話にならない。逆にどれだけ若くても、実力があればその世界では認められるのである。それがよくわかる例として、プロ野球西武ライオンズの松坂大輔選手がいる。

松坂選手は高校時代、横浜高校で甲子園を舞台に活躍したのもみなさんの記憶にも新しいことであろう。彼は高校時代から時速150kmを越すストレートを投げていたのである。これはプロであってもすごいことなのである。その後、彼はドラフト1位で西武ライオンズに入団し、その年素晴らしい成績を上げ、パ・リーグの新人賞を獲得したのである。まさに実力である。彼はこの実力でプロ野球界に認められた。というより、実力で認めさせたのである。このようなプロの世界では、上下関係も実力で決まるのでありと考えていた。しかし、現実はそのようではなかった。プロの人の中には自分が年上であるからといって、傲慢な態度をとる者もいる。プロとは思えない考え方である。若い選手が年上の人に対して「謙遜な態度をとるのはよいことであるが、その傲慢な態度をとる者の中には「能力は平等だ」という考え方があるのではないか。「だから、その分たくさん経験をしている自分たちの方がえらいのだ」と考えるのであろう。

しかし、そんな考え方を持った者たちを一蹴するような一言を放った人物がいる。その人物は僕が尊敬する、サッカーイタリアリーグセリエAで活躍する、中田英寿選手である。彼は『中田語録』の中でこう語った。

『年齢や経験を問題にするなんてナンセンス』

「フィールドにたてば、選手は平等で上下なんて無いはず。必死で勝とうと思って戦っている時に、言葉遣いがどうか、態度がどうか問題にしている場合じゃないでしょう。」リーグは仲良したちが集まってやる遊びや学校のクラブ活動じゃない。サッカーはオレたちにとって生活のための手段。ピッチの上で『さん付け』する事に気を遣う余裕なんてないはずでしょう。プロは実力がすべてだから。」

確かに彼の言うとおりでであると思う。彼はフィールド上では、ベテランのプレーヤーに対しても呼び捨てにするのである。例えば、フランスワールドカップの時では、名波選手のことナナ、森島選手のことをモリシ、川口選手のことをヨシカツと呼ぶ。しかし、そう呼ばれている彼らはイヤとも「ムッ」とも思わない。やはりプロであるからである。プロと呼ばれる者はこうであらなければならないと思う。また、彼は高校時代にも、「1学年違うだけで主従関係が生まれるのか納得できない」という疑問を持っていたらしい。そして、プレー中では学年など意識せず、名前は呼び捨てであったし、タメ口であり、ミスをすれば怒鳴ることもあったらしいのである。そのため、先輩からは嫌われていたらしい。

中田英寿、彼の考え方は日本の上下関係のシステムとは正反対である。そして、彼の考え方がスポーツ界において本当にあるべき考え方であると思う。

僕はそんな考え方をする彼のことをとても尊敬している。彼がJリーグの中で考え方の上で少し変化をもたらしたと思う。そして、この先もその考え方を広げていって欲しい。彼の考え方が日本の上下関係のシステムを崩すきっかけとなることを望んでいる。



## 第3章

### A．社会への影響

日本の上下関係のシステム、「年功序列主義」。このシステムにはいくつかの問題がある。その1つは本当に能力を持った者が認められず、そのまま世間には出ないという場合である。いわゆる宝の持ち腐れということである。この場合はそれぞれ個人の利益の有無以外にも国全体、世界全体の利益の有無にも関わってくると言うことである。例えば、ある人がガンの治療薬を作れるであろう能力を持っていたとしても、それを発揮する場所が無くては意味のないことである。「実力主義」の社会であればその人の能力により薬が作られ、何千もの人の命を救うことができるであろう。しかし、今の「年功序列主義」の中では年齢などが優先され、その人の能力が世間に出なかったのであれば、そのままガンで命を落とす人はたくさん現れるであろう。というようにこのことはとても大きな問題なのである。やはり、これからは公共の利益のことも考えると「能力主義」という考え方を広めていくべきであると思う。

### B．思うこと

敬語と上下関係、この2つはどちらが先にできたとは言い切ることができない。敬語という考え方がなければ、上下関係も生まれてこなかったであろうし、逆に上下関係という考え方がなければ、敬語が生まれてくることもなかったであろう。2つは互いに影響しあいながら作られてきたものである。

敬語と上下関係は各国の文化が大きく関係するものである。考え方、言語、昔からの積み重ね、様々なものから影響を受けるのである。それらは世界のどこにでも存在するものなのである。

本当は、上下関係などなく、平等な世界が望ましいのである。

## 第4章 展望

希有ごと上下関係について述べてきたのであるが、敬語と一口に言っても尊敬語、謙譲語、丁寧語と3つの種類がある。この3つの表現方法1つ1つについてもっと深く調べていく必要があると感じた。そうでなければ、文章中の「敬語」という言葉があいまいになり、あるいは抽象的な表現となってしまう危険性がある。さらに3つの表現方法について調べることによって、視野が広がりもっと多方面へと目を向けることができるであろう。また、言語と上下関係の関係についてももっと語学を勉強すべきであると感じた。物事を広く浅く調べるのではなく、ゆっくりでいいから、広く深く調べていく必要があると思った。

## 参考文献

- ・中根 千枝 『タテ社会の上下関係』(講談社 1967)
- ・新井 信 『中田語録』(文 春秋 1998)
- ・黄 通 『敬語と上下関係について』
- ・Weekly FUS 『言葉』

## あとがき

「考えるレポート」というものを始め見たとき、正直、こんなの無理だと感じた。でも、完成してみると人間ってやればできるものなのだなぁと感心した。この達成感はとても気持ちの良いものだなぁと思った。何か1つのためにあれこれとがんばることが素晴らしいことだということを実感した。また、結果(結論)まで到達するまでのプロセスがとても苦勞した。これはすべてのことにおいて共通することだから、この先いろいろと役立つだろうと思う。とても良い経験になったと思う。

2001年 12月 20日